五つの命

野村胡堂

一

「親分、変なことがあるんだが――」

ガラッ八の八五郎がキナ臭い顔を持ち込んだのは、まだ屠蘇機嫌のぬけ切らぬ、正月六日のことでした。

「何が変なんだ、松の内から借金取でも飛込んだというのかえ」

銭形の平次は珍らしく威勢よく迎えました。ろくな御用始めもないので、粉煙草ばかりせせって、心待ちに八五郎の来るのを待っていたのです。

「借金取や唐土の鳥には驚かねえが、――こいつは全く変ですぜ、親分」

「だから何が変だと言ってるじゃないか」

「一町内の子供が五人、煙のように消えてなくなったのは、変じゃありませんか、親分」

ガラッ八の小鼻は、天文を案ずるように脹れます。

「子供が五人揃って消えた？――そいつは抜け詣りだろう」

平次は事もなげです。その頃子供たちが誘い合せて、親の許しを得ずに、伊勢詣りの旅に出ることがよく流行りました。伊勢詣りとわかれば箱根の関所もやかましいことは言わず、先々の宿も舟も、何彼と便宜を与えてくれる世の中だったのです。

「七つから九つまでの子供ですぜ、その中には女の子が二人いますよ」

「成程そいつは少し変だな」

「その上、夕方かごめかごめか何んかやって遊んでいて、不意に見えなくなった。菅笠(すげがさ)も柄杓(ひしゃく)も仕度をする間がありませんよ」

どんな無鉄砲な抜け詣りも、それ位の用意はあるべき筈です。

「神隠(かみかく)しかな」

平次はいつの間にやら、坐り直しておりました。

「そんなものはあるでしょうか、親分」

人間が不意に見えなくなって、何日か何年かの後、ヒョックリ現われるのを、昔は羽黒や秋葉の天狗(てんぐ)のせいにして、これを神隠しと言ったのです。その中には誘拐(ゆうかい)や、迷子や、記憶(きおく)の喪失(そうしつ)や、借金逃れもあったでしょうが、昔の人はそんな詮索(せんさく)をする気もないほど鷹揚だったのでしょう。

「――」

「神や仏が、そんな虐(むご)たらしい事をする道理は無いじゃありませんか、ね親分。五人の子供の親達の嘆きは、見ちゃ居られませんよ」

「――」

「何んとかしてやって下さいよ」

「何処だえ、それは？　何時のことなんだ」

平次はようやく乗出しました。

「本郷の菊坂で」

「フーム」

「三日前、よく晴れた夕方でしたよ。胸突坂(むなつきざか)の下で遊んでいた町内の子供が五人、どこへ潜り込んだか、しばらくの間に掻(か)き消すように見えなくなったんですって――」

「遊んでいたのを、誰が見ていたんだ」

「空地で遊んでいたのを、多勢の人が見て居ましたよ。尤も一番後で五人の子供が空地の隅っこに一とかたまりになって話しているのを見たのは、鋳掛屋の権次という、評判のよくない男で」

「それがどうしたんだ」

「鍋鋳掛が一とわたり済んで、空地に拡げた店を片付けていると、五人の子供ちたちが、何にか脅えたように、ひとかたまりになって喋って居たそうです。権次はそれっ切り中富坂の家へ帰ったから、後は何んにも知らないと言うんで」

「誘拐しかな」

「五人の子供を一ぺんに誘拐す工夫はありませんよ。脅かしたって、騙したって、人目につかないように、何処へもつれて行けないじゃありませんか」

「――」

©2017 萩 柚月

「五羽の軍鶏だって、人に知らせずにそっと始末するのはむずかしいでしょう」

ガラッ八は躍起となって抗弁しました。これがまる二日考え抜いた智恵だったのです。

「近頃ほかに人さらいの話はなかったのかな、――綺麗な子をさらって人買いに売るといった」

人買いという世にも残酷な悪人が、その頃はまだ根絶していなかったのですが、さらわれるのは、男も女も、必要の上から、必ず綺麗な子に限られていたのです。

「親分、そいつはあっしも考えたが、五人の中で綺麗なのはお光というのがたった一人だけ、あとは念入りに汚い子ばかりですよ。人さらいだって、あれじゃ磨きようがないと、親達が言うんだから嘘じゃありません」

「子をさらっておいて、金にする手もあるぜ、そいつは一番憎いが、――そんな様子はないのか」

「三日経つが、何んとも言っちゃ来ません。尤も揃いも揃って貧乏人の子ばかりだから、一両ずつ出せと言ってもむずかしい位で、あんなのじゃ商売になりませんよ」

ガラッ八は大きな手を振りました。

「そこまで気が付けば、あとは俺が行っても調べようはあるまい、――とにかく四宿を堅めて、江戸から持ち出させねえようにするが宜い、それから大川筋が一番臭い、船を虱潰しに調べることだ」

「その手配はして置きましたよ、菊坂の富五郎親分が一生懸命で」

「ほかに工夫はあるまいよ、――それから、五人揃えて遠くへ連れて行くのはむずかしかろう。――近所の菓子屋で近ごろ変った

客がないか訊いて見るが宜い。子供五人音を立てさせないようにして置くには、少し位の菓子じゃ間に合うまい」
「へエ――」
「何んか変ったことがあったら、そっと教えてくれ。宜いか」
「へエ――」
「お前の手柄になりそうだ、――五人の子供を助けるのは、功徳にもなるぜ」
平次の激励を背後に聴いて、ガラッ八は出かけて行きました。事件には充分に好奇心を持ちながら、ガラッ八の手柄にさせる気で、平次はしばらく神輿をあげないつもりでしょう。

二

「親分、だから言わないこっちゃない」
ガラッ八が旋風のように飛込んで来たのは、七草粥がすんだ翌日でした。
「何をあわててるんだ。格子で鼻面を打ったり、弥造を拵えたまま人の家へ飛込んだり、第一、突っ立ったまま話をする奴があるかい」
「だから、親分は困るじゃありませんか、昨日ちょいと顔を出しゃ、人一人死なずに済んだかも知れない」
「誰がいったい死んだんだ、落着いて話せ、八」
「あの娘の弟ですよ」
振り返ると入口にしょんぼり立って、十八九の美しい娘が、中の様子に気を兼ねながら、ときどき湧き上がる涙を拭いて居るの

です。

「どこの娘さんだか知らないが、門口へ立って泣いていちゃ気の毒だ。早く中へ入れるが宜い」

平次が立上がる迄もなく、早くも裏口から廻った女房のお静は、泣き濡(ぬ)れる若い娘を、抱き上げるようにして家の中へ入れてやりました。

少し眼を泣き脹(は)らしておりますが、初々(ういうい)しいうちに確(しっか)り味のある娘で、至って粗末な身なりながら、好みも上品に、顔形もよく整って、何んとなく人好きのする風情があります。

「一体どうしたというのだ、話して見るが宜い」

平次は静かに問い進みました。

「お新さんというんですよ。九つになる弟の信太郎と八つになる妹のお光と、二人いっしょに行方不明になって、母親とさんざん心配していると、一昨日の晩ヒョックリ信太郎が帰って来て――」

「何？　帰って来た、――あの五人組の一人だな」

「――何を訊(き)いても言わねえ様子を見ると、三日のあいだ、子供心にもどんなに心配したものか、賽(さい)の河原から逃げ返ったようにやつれて居るが、どこへ行ってどうしていたか、なだめても、すかしても言わねエ」

「それから何(ど)うした」

「とにかく、夜更けでもあり、本人が脅(おび)え切って、雨戸を開けるのさえ怖(こわ)がるから、万事は夜が明けてからとして、親子三人一室へ床を敷いて、トロトロとするともう朝だ。母親は食事の仕度をして、お新さんは町役人やら、いっしょに子供の見えなくなった家へ知らせて帰ると、不思議なことに、六畳に寝ていた筈の信太

郎は見えない」
「フーム」
八五郎の話すのを聴きながら、お新はまたドッと湧き上がる新しい涙にひたっております。
「また大騒動になって、町中探したが見えない、一日ひと晩騒ぎ疲れて、今朝になると――」
ガラッ八もさすがにゴクリと固唾を呑みました。お新はもう畳の上に突っぷして、声をあげて泣いているのです。
「どうしたというのだ」
平次もツイ乗出します。
「殺されていたのですよ、――虐たらしく。死骸は五日前に五人の子供たちが見えなくなった、空地の枯草の中に捨ててあったが」
ガラッ八はこれだけ説明して口をつぐみました。そのときお新は涙を拭いて、ようやく口をはさんだのです。
「親分さん、それにまだ妹のお光が帰って来ません。助かるでしょうか」
こんな心配にさいなまれて、お新はガラッ八といっしょに、平次へ縋りに来たのでしょう。
「そいつは気の毒だ、俺の力に及ぶことなら何んとかしよう。尤も、弟さんが帰った晩、すぐ手を廻せば、何んとかなったかも知れないが、ひと晩のおくれは大変なことになったのだよ」
「私共の手落ちでございました、親分さん。母もそればかり言って、あきらめ兼ねております」
お新はそう言ってまた泣くのです。

三

平次はすぐ菊坂へ出かけました。現場もよく調べ、御用聞の富五郎にも逢って、いろいろ聴き出しましたが、八五郎が報告した以外には、何んの手掛りもありません。

行方不明になった子供は五人、お新の弟信太郎と妹のお光、それに孫吉というのが八つ、三次というのが七つ、お留というのが六つ、いずれも荒物屋の子、駄菓子屋の子、日雇取(ひようとり)の子で金を目当てにさらわれる筈もなく、お新の母親のお豊は武家の後家(ごけ)で、少しは貯(たくわ)えもあるようですが、長いあいだ賃仕事をして、これも細々とした暮しです。

菊坂の空地というのは、胸突坂(むなつきざか)の下から本妙寺の裏につづいた荒れ地で、子供の遊び場と町内の埃捨場(ごみすてば)になっている、何んの変哲もない場所で、そこには捨井戸も穴もあるわけはなく、五人の子供を音も立てさせずに隠せる道理はありません。

「この通りだ親分、――四宿も船も手の届くかぎり調べさせたが、この十日あまり、江戸からろくな猫の子を持出した者もありませんよ」

八五郎はすっかり持て余し気味です。

一軒一軒、子供の家を訪ねましたが、五日あまりの心配に打ちひしがれて、何を訊いても一向らちがあきません。最後にたどりついたのはお新母娘の家。

「親分さん、この上は娘のお光だけでも無事に帰りますよう、――お願い申上げます」

武家の出だったという母親のお豊も、唯(ただ)おろおろと泣くばかり

です。

平次は一応信太郎の死骸を見せて貰いました。九つというにしては柄の小さい、ひ弱そうな子ですが、その代り智恵の方はよく廻ったらしく、眼鼻立もキリリとして、死骸の可愛らしさは涙を誘います。

喉のあたりに大きく痣の残っているほか着物に取乱した様子のないのが、何にか知ら合点の行かないものがあります。

「この着物は五日前からズーッと着ていたのかな」

「いえ、一昨日の晩帰って来た時、あんまりひどい様子をしているので、着換えさせました」

お新はすぐ応えました。

「その着物を見せて貰おうか」

「ハイ」

立ち上がって、押入から袖畳みにした子供の着物を出して、平次の前に押しやります。

「フーム」

平次が唸ったのも無理はありません。着物はまだ真新しいのですが、ひどく埃と泥とに汚れて、所々には蜘蛛の巣が引掛っている上、幾つかの鉤裂まで拵えてあるのです。

ひと通り眼を通すと、平次はその着物を熱心に嗅ぎ始めました。

「何んか匂いがあるんですか、親分」

ガラッ八も大きな鼻を蠢めかします。

「この匂いは何んだと思う――」

「？」

「良い薫りだろう、線香の匂いにも似ているが、馬糞線香じゃな

い」

二人は顔を見合せるばかりでした。

「こんな匂いを何処かで嗅いだことがありますよ」

「思い出してくれ、頼むから」

「へエ――」

ガラッ八の鼻の穴は、何んか遠い記憶を辿るように天を仰ぎました。

「ところで、誰かに怨まれているような心当りはないのかな、――元は身分の方だったと聴いたが」

平次はうら淋しく仏の前にうずくまる母親に訊きました。

「いえ、それはもう二十年も前のことで、――それも軽い身分でございました。夫に別れて七年になりますが、人様に怨まれる覚えはございません」

そう言われるまでもなく、こんな人柄な母子を、怨んでいる者があろうとも思われません。

「親分、あの菓子屋の方も本郷から小石川中調べましたが、変ったことはありませんよ」

ガラッ八は口を挟みます。

「よしよし、菓子や飴でつなげるのは半日やひと晩だけさ。五人の子供を六日も七日も隠すのに、そんな細工じゃ駄目だ、あれは俺の考え過ぎだったよ。ところでお前は権次とか言う男に逢ったのか」

「鋳掛屋の権次でしょう、逢いましたよ」

「案内してくれないか」

「あの野郎は天道様の当るうちは、野天に陣を張って鍋鋳掛を

やっているから、どこに居るかわかりゃしません」
「家はどこだ」
「中富坂で、――行って見ましょうか」
「ともかくも当って見よう」
二人は其処からほんのひと丁場の中富坂まで行って見ました。

四

「何んにもない」
鋳掛屋権次の家へ踏込んで、ひとわたり家捜しした平次は、さすがに呆れ返って埃だらけになった手を叩きました。
「打つ飲む、両刀遣いだから、ろくな行火もありゃしません。飛んだくたびれもうけで」
八五郎も苦笑するばかりです。木枯の吹いた後の雑木林のような淋しい世帯は、八五郎の巣よりも惨憺たるものです。その日菊坂の空地に鋳掛の仕事をしていた権次が、事件に何んかの関係を持っているかも知れないと思った平次の勘は、これで見事に外れました。ここには行方不明になった五人の子供は愚か、五匹の鼠も住んじゃ居ません。
「親分」
ちょっと外へ出た八五郎は、面喰ったように飛んで帰りました。
「何んだ」
「権次は真砂っ原にいますよ、近所の人が見て来たそうで」
「行って見よう」
二人は真砂町まで引返したことは言う迄もありません。

「あれだ、親分」
遠くから指されるのも知らずに、鋳掛屋の権次は、近所から集めた鍋や釜を六つ七つ並べた中に、フイゴを据(す)えて、煙草を輪に吹いているのでした。まさに『鍋鋳掛すてっぺんから煙草にし』といった図です。
「おい、権次」
「あッ、銭形の親分」
平次はその前に立ちはだかりました。顔を挙げたのは四十五六の乾(ほ)し固めたような男、貧乏摺(びんぼうず)れがして、猿のような眼が、ずるそうにまたたきます。
「あの日のことを、もう一度くり返してくれ。お前の口から聴きたいんだ」
「ヘエ、何べんでも繰返(くりかえ)しますが、大したお役に立ちようもありませんよ、親分」
「そんなことはどうでも宜い」
「ヘエ」
権次はペラペラと繰返しました。今から六日前の夕刻、菊坂の空地で仕事をしていると、近所の子供たちが五六人で、面白そうに遊んでいましたが、そのうちに薄暗くなって、仕事仕舞にして立ち上がると、今まで空地一パイに飛廻っていた子供が、掻(か)き消(け)すように見えなくなった――というのです。
「それに間違いあるまいな」
「ヘエ」
「本当に掻き消すように見えなくなったのか」
「ヘエ――、神隠しか何んかでしょうな、あれは。その時は大し

た気にもかけませんでしたが、あとで五人の子供衆が帰って来ないと聴いて、ゾッとしましたよ」

「それから菊坂の空地へ行かないのは、どういうわけだ」

平次はいつの間にやら、そんな事まで捜っていたのです。

「あすこは良い仕事場でしたが、あの事があってから、気味が悪くて行く気になりませんよ」

「たいそう気が弱いんだな」

「ヘエ、今日も仕事を休んで帰ろうと思いますよ。この近所の衆があっしの顔を見て、こんなに仕事を持って来てくれましたが、フイゴが損(そん)じて仕事が出来ません」

こんな事で一向要領を得ぬまま、平次は引揚げなければならなかったのです。いつまで待っても権次は仕事を始めそうもありません。

「八、あの権次の身持をよく捜って見てくれ。大した役に立たないかも知れないが、念のためだ」

「親分は？」

「俺はあの子供の着物の匂いを突きとめに行くよ」

「ヘエ――」

「尤(もっと)もどこへ行ったものか、俺にも見当はつかないよ。香木屋(こうぼくや)かな、香道の先生かな、それとも寺方かな」

平次も首を捻(ひね)って居ります。

五

その翌る朝、もう一度ガラッ八が飛込んで来ました。

「親分、大変ッ」
「サア、とうとう来やがった、お前が飛込んで来そうな日和だと思ったよ」
平次は空模様などを見ながら、からかい気味に言うのです。
「落着いていちゃいけませんよ、本当に大変なことになったんで」
「子供たちが帰ったのか」
「そんな事なら驚きゃしません、また菊坂に人殺しがあったんですよ」
「何？　また菊坂に？　誰が殺されたんだ」
「鋳掛屋の権次」
「よし、行って見よう」
平次は十手を懐中にねじ込むと、もう立ち上がって居りました。そこから菊坂までは、ほんのひと飛び。
鋳掛屋の権次は、嘗て五人の子供が行方不明になった空地の真ん中ほどに、紅に染んでこと切れていたのです。
菊坂の富五郎とその下っ引達、町役人まで顔を揃え、群がる弥次馬を追い散らしておりましたが、平次の顔を見ると、富五郎はホッとした様子です。五人の子供のうち一人は殺され、四人はそれっ切り行方不明で、次第に募る町内の非難やら、八丁堀のお叱りやらで、つくづく気が滅入っていたのでしょう。
「お、銭形の、この通りだ」
「どれどれ、恐ろしく出来た腕だ」
平次は死骸を引起して舌を巻きました。
「権次はやくざ附き合いをして、評判の悪い男だった。なんか盆莫蓙の間違いじゃあるまいか」

富五郎はそんな事を考えているのです。

「いや違う、富五郎兄哥の前だが――この手ぎわを見てくれ。やくざ剣術は刀を引きながら斬るから、傷口は手前が下がる。まして権次は逃げるところを後ろからやられたんだ。相手がやくざ者なら背中の方がもっと割けている筈だ、――ところが、権次は背後から斬られているくせに、切先が胸の方へ下がっている、これは据物斬の名人の腕前だ。突っ込むように、前下がりに斬った傷だ」

据物斬りの口伝を平次は聴覚えていたのです。武士は突き出すように斬り、やくざは引きながら斬る。剣道にはこの二つの型――画然たる上品下品の型のあることを平次は思い出したのでした。

「すると？」

富五郎は四方を見廻しましたが、そこには寺方も武家屋敷もあり、何事を目当に捜しようもありません。

権次の懐を探りましたが、百も持ってはいず、手拭に包んで腹掛の底に潜ませたのは、ひと束の鍵だけ。権次は鍵や錠前の直しもやったのですから、これも商売道具の一つと言ってしまえばそれまでです。

「八、もういちど中富坂へ行って見よう、――俺は見落したものがあるような気がする」

平次は八五郎に合図をすると、そこはそのままにして、もういちど権次の家へ行って見ました。

「ここには何にもありませんぜ、親分。この間天床裏から床下まで見たじゃありませんか」

「いや、もうお前を床下へ入れるまでもあるまい」

平次は家の中へ入ると、いきなり商売道具のフイゴに手を掛けました。
「そのフイゴは損じていると言ったようですね」
「それを思い出したんだ――この通りだ。持ち上げて見るが宜い」
「へッ」
八五郎は小さいフイゴに手を掛けましたが、何が入っているのか、容易(よういに)動きません。
「かまわないから打ちこわして見ろ」
「へエ」
平次とガラッ八が一と骨折って頑丈(がんじょう)なフイゴをこわしました。中から出たのは、ザクザクと真新しい小判、ざっと小千両もあるでしょう。
「これだ、八」
「どこから持出したでしょう」
「言う事が変だと思ったら、この野郎は五人の子供の隠された穴を知っていたんだ」
「穴ですか」
「香木のある穴だ。伽羅(きゃら)だか、沈香(じんこう)だか知らないが、とにかく、名香をしまってある穴だ。来い、八」
「へエ――」
平次とガラッ八は、フイゴと小判を町役人に預けて、もう一度引返しました。

六

二つ三つ心当りを捜って、菊坂の空地に引返すと、もう夜でした。富五郎も町役人も引上げて、その辺一帯不気味に静まり返っております。

「この辺に大名屋敷はあるかい、八」

「ありますよ、本郷の通りへ出ると百万石の加賀様、春日町へ下ると水戸様だ」

「そいつは少し遠過ぎる、もう少し近いところはお前じゃわかるまい。近所の人を一人呼んで来てくれ、なるべく年寄(としより)が宜いな」

やがて八五郎は近所の老人を一人つれて来ました。それに同じことを訊くと、

「菊坂の北は本多美濃守(みののかみ)様、阿部伊予守(いよのかみ)様」

「それから」

「菊坂を挟(はさ)んで小役人、御家人の屋敷が二三百あって、西には松平右京亮(うきょうのすけ)様、南には松平伊賀守様のお下屋敷があります」

「そんな事かな」

平次は少しがっかりした様子です。

「外にはありませんよ」

「八、下っ引を五六人飛ばして、その辺の大名屋敷を片っ端から訊かせるんだ。盗賊は入りませんかと――いや待て待て――大名屋敷に伽羅(きゃら)や沈香(じんこう)があるのは不思議はないが、大名が町家の子供を五人もさらって行く道理はない――それにお新の弟の信太郎は、一度は無事に帰っている。あの子を殺したのは武家じゃない――権次を斬った人間とは別だ」

「すると？」
「待ってくれ、ほかにこの辺に大名屋敷はないのかな」
「ありませんよ」
近所の老人は答えました。
「伽羅や沈香は、こちとらの家にある品じゃない――ところで、鋳掛屋の権次は空地のどの辺に店を張って仕事をしているんだ。だいたい場所がきまっているだろう、炭の断片か、鉄屑がある筈だ。――この辺か、よしよし。ここから、子供たちの遊んでいた場所を見て居たとする。おや？　あれは何んだ」
平次は空地の向うの隅にある粗末な土蔵――月の光にほのかに光るのを指しました。
「去年お取潰しになった、讃州丸亀の山崎志摩守様の御下屋敷跡ですよ。土蔵一つだけ残っていますが、あれはひどい雨漏りで、山崎様御盛の頃払下げになり、取こわすつもりで、そのままになっております」
町の老人が説明してくれました。
「持主は？」
「誰にも分りません。中に狸が棲んでいるの、大蛇がいるのって、不気味な噂が立ちますが、誰の物とも分らないので、手のつけようがありません」
「開けてくれまいか」
「それは困りますよ、親分」
「あとは俺が引受けた。ともかく中を見よう」
平次はもうその土蔵の前に立っております。
「大丈夫ですか、親分」

ガラッ八は心配そうに覗きました。

「大丈夫だとも、五人の子供を遠くへ持って行ける筈はない。生きてピンピンしているんだ。この土蔵に気の附かなかったのは俺の手ぬかりさ――権次の懐に鍵の束があったな、あれを借りて来てくれ」

やがて銭形平次は、ガラッ八が借りて来た鍵の束の中から合いそうなのを捜し出して、錠前にガチャガチャやっております。

「親分、不意に内から切って出たらどうします」

ガラッ八はそっと袖を引きました。

「馬鹿野郎、曲者が中へ入って自分で鍵がかけられるか、それよりお前の後ろを見ろ」

「あッ」

ガラッ八が身をかわすのと、白刃が閃めくのと、そして平次の手から投げ銭が飛ぶのが一緒でした。

「曲者ッ」

平次は早くも左手に十手を抜き出します。右手には高々と構えた、四文銭が一枚。

「無礼者ッ、誰に断ってその錠前を開ける」

曲者は一刀を脇構えに叱咤しました。恐ろしく精悍な感じのする中年男です。

「四人の子供の生命を助けるのだ、誰に断ることがあるものか」

「己れッ」

サッと斬りつけて来るのを外して、平次の手から、二枚、三枚、銭が飛びます。宵月はありますが、どんな手練も、夜気を劈いて飛ぶ銭を受けようはありません。

「汝(おの)れ」
曲者は拳(こぶし)を打たれ、頬を打たれ、額(ひたい)を打たれ、顎(あご)を打たれてひるむところへ、平次は隙(すき)を見て体当りをくれました。
「野郎ッ」
後ろからはむずと組みつく八五郎の怪力。
「八、その野郎は俺一人でたくさんだ。早く土蔵を開けて。中を見ろ、四人の子供が死にかけているに違いない」
「合点ッ」
八五郎はパッと土蔵の中に飛込むと、平次の手を逃れて、曲者もそれにつづきます。
「八、気をつけろ、曲者が――」
平次が声をかける間もありません、土蔵の闇の中では、八五郎と曲者との必死の闇試合が始まっているのです。

× ×

その間に騒ぎを聞いて、町役人と鳶(とび)の者が駆け付けました。幸い曲者の刀は、平次の投げ銭に奪い取られて、八五郎の剛力はそれを組み伏せたところへ、灯(ひ)の洪水(こうずい)が土蔵一パイに照らし出したのです。
中には幾つかの唐櫃(からびつ)と長持。
「四人の子供がいる、一つ残らず開けて下さい」
平次の号令に、唐櫃も大長持も一つ一つ開かれました。
中から出て来るのは、夥(おびただ)しい骨董(こっとう)、金銀、香木。
「あッ、これはどうだ」
何千両とも、幾万両とも知れぬ大判小判の波の中に、町役人はただ驚きの声をあげるばかりです。

「子供はいない」

「そんな筈はない、もう少し見て下さい」

残る長持が二つ、その中の一つを開けると二人の女の子が半死半生で転げ出ました。

「あ、お光ちゃんと、お留ちゃんだ」

もう一つの長持には、残る三次と孫吉。

四人とも生きた色もありませんが、そのとき駆け付けた親兄弟に抱き上げられて、ただシクシクと泣くばかりです。

土蔵の中にあったのは、昨年三月、八歳の当主虎之助治頼が死んで、公儀から御取潰しになった、丸亀四万五千石の城主、山崎家の財宝ばかり。側用人丹下村右衛門は先代志摩守歿後ドサクサ紛れに三万六千両の黄金と、おびただしい財宝骨董をこの土蔵に取込み、山崎家取潰しの時これを目録から除外させて、ほとぼりのさめた後、持ち出すつもりでいたのです。

子供ら五人を土蔵に封じたのは、隠れん坊に浮かれて、うっかり閉めずに置いた土蔵の中に入ったのを、村右衛門が発見して大いにおどろき、五人ことごとく縛って猿轡を噛ませ、長持に入れて口を塞ぎ、土蔵の秘密の世間に漏れるのを防いだのです。その間に折を見て中の財宝を持出す計画だったことは言うまでもありません。

五人の中で悧口な信太郎は、隙を見て土蔵を脱出しましたが、村右衛門に脅かされた言葉が恐ろしくて秘密を漏す間もないうち、鋳掛屋の権次に誘い出され、こんどはうんと権次に責められて土蔵の秘密を打ち明け、かえって権次に殺されたのでしょう。これは丹下村右衛門の口から聴いたことと、いろいろの事件とを

綜合(そうごう)して、平次の組み立てた想像です。

信太郎から秘密を聞いた権次は、合鍵(あいかぎ)で土蔵に忍び込み、一度は小判を盗み出しましたが、二度目には村右衛門に見附けられて斬られてしまいました。

「主家の御取潰しに紛(まぎ)れて、大金と宝物を取込むとは太い奴じゃありませんか」

八五郎が腹を立てるのも無理のないことです。

「その通りだ。あの金は山崎家の後を立てるために、旧臣(きゅうしん)の身の立つために、入要な金だったんだ。それに、五人の子供を長持に入れて置くとは鬼のような奴さ。殺すつもりはなかったにしても、一日おくれると助けようはなかった。俺は子供にひどい事をする奴は許す気になれないよ」

平次のこんな激しい憎悪は、ガラッ八も見たことはありません。

丹下村右衛門が極刑(きょっけい)に処せられたこと、お豊お新母娘の喜びなど、語るまでもないことです。

そして八五郎がどんなにお新に親切だったかということも。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和十八年一月号　文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第七巻　河出書房　昭和三十一年八月五日初版

編集・発行　銭形倶楽部

銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/